

我らが時代の英雄、
報道記者たちへ

自由なき世界（上）

◇目次

プロローグ（二〇一〇年）

1

第1章 個人主義か全体主義か（二〇一一年）

21

第2章 継承か破綻か（二〇一二年）

53

第3章 統合か帝国か（二〇一三年）

97

第4章 新しさか永遠か（二〇一四年）

159

上巻原註

1

下巻目次

第5章 真実か嘘か（二〇二五年）

第6章 平等か寡頭政治か（二〇二六年）

エピローグ（二〇——年）

謝辞

訳者あとがき

下巻原註

索引

凡例

- 1 原題 *The Road to Unfreedom* にある *Unfreedom* (本書文中でも「自由なき世界」) は著者による造語である。日本語訳の題名の決定にサジェスチョンを寄せてくれた著者スナイダー氏に感謝する。
- 2 本書を貫く対立概念である「必然性の政治」(politics of inevitability)、「永遠の政治」(politics of eternity) は著者による造語である。前著『暴政——20世紀の歴史に学ぶ20のレッスン』の「エピローグ 歴史と自由」にすでにキーワードとして顔を見せていた。本書中には他にも *sadpopulism* (*sadpopulist*), *schizofascism* (*schizofascist*) といった魅力的な概念が出てくるが、それらの語の初出も一般的に著者に帰せられている。本文中では外国語は、原則として英文アルファベットの使用にとどめた。英文アルファベットへの翻字については原註ページを参照のこと。
- 3
- 4 「」は著者による補いや註であり、「」は訳者による註である。

プロローグ（二〇一〇年）

息子が生まれたのはウィーンだった。難産だったので、オーストリア人の産科医とポーランド人の助産師がまず心配したのは赤ん坊のことだった。息子は呼吸いきをしていた。母親は少しの間彼を抱いてから、手術室に運ばれていった。助産師のエヴァが、赤ん坊を私の腕にそっと預けた。息子も私も、次に起きたことにいささかとまどいながら、身体をぴたりとくっつけ合っていた。緑色の手術着をまとった外科医たちが、マスクをパチンとかけて足音も高く霞のように私たちの前を走り抜けたとき、息子は焦点の合わないスミレ色の瞳で宙を見上げていた。

次の日はすべてが順調のようだった。看護師たちから、母子とも明日の朝までこちらで看ているから、通常の退出時間の午後五時には病棟からお帰りくださいと言われた。そこでようやく、いくぶん遅れはしたが、Eメールで息子の誕生を皆に知らせることができた。なかには、大勢の人の命を奪った大惨事を知ると同時に私からの吉報を読むことになった友人たちもいた。友人の一人で、私が前世紀にウィーンで出会っていた学者仲間、ワルシャワ・シヨパン空港で飛行

機にさつさと乗りこんでいた。私のメッセージは光の速さで送られたが、それでも彼に届くことはなかった。

二〇一〇年は過去を顧みるのにふさわしい年だった。その二年前に起きた金融危機で世界の多くの富が失われ、回復の鈍さは富裕層に有利に働いていた。アメリカ合衆国の大統領にはアフリカ系アメリカ人が就いていた。二〇〇〇年代に入ってからヨーロッパの大いなる冒険、すなわち欧州連合（EU）の東方への拡大は、ついに完了したかに見えた。二一世紀に入って一〇年、ヨーロッパでの共産主義の終焉から二〇年、第二次世界大戦の開戦から七〇年けみを閲して、この二〇一〇年は、もろもろの判断を下すのにふさわしい年であるかと思われた。

その年、私はまさにその作業に、死を間際にした一人の歴史家とともに取り組んでいた。トニー・ジャットを私が高く評価する理由は、何より彼が二〇〇五年に上梓したヨーロッパの歴史書の『ヨーロッパ戦後史』にある。これは帝国の断片を寄せ集め、世界最大の経済圏にして民主主義の最重要地域にまとめあげるといふEUの信じ難い成功について詳述したものだ。この書は、ヨーロッパ・ユダヤ人のホロコーストの記憶に関する省察で締めくくられていた。二一世紀には、手順を踏み、金を注ぎこむだけではじゅうぶんとは言えなくなるだろうとジャットは示唆していた——政治を良識あるものにするためには、恐怖の歴史を語り継ぐことが必要になるだろう、と。

二〇〇八年、トニーは神経変性疾患である筋萎縮性側索硬化症（ALS）を発症していた。意

のままにならない身体に閉じこめられて、確実に死にゆく運命にあった。トニーが両手を使えなくなつてから、私たちは二〇世紀に題材を得た対話を録音し始めた。二〇〇九年に話し合つていた時点で、二人ともが懸念を抱いていたのは、「資本主義は不変であり民主主義は必然である」とアメリカ人が思いこんでいることだった。以前にトニーは、二〇世紀に全体主義に手を貸した無責任な知識人について著したことがあつた。そして今や、二一世紀に新たに見られる無責任な態度について危惧していた。その態度とは、議論を平板なものにし、政策を無効にし、不平等を常態化させてしまう「思想の完全な拒絶」であつた。

トニーと対話を重ねていたころ、私は、一九三〇年代と四〇年代のヨーロッパでナチス・ドイツとソヴィエト連邦が犯した政治的大量虐殺の歴史について執筆を進めていた。その書はそもそも、ナチス・ドイツとソヴィエト社会主義共和国連邦の支配が重なつた土地にいて両方の体制を経験した人々と彼らの故郷、とりわけユダヤ人、ベラルーシ人、ウクライナ人、ロシア人、バルト人、ポーランド人の存在あつてこそ語り始めることができたのだつた。その書の内容——計画された飢餓、死の穴、ガス室——は陰鬱ではあつたが、前提としていたのは前向きなものだつた。大量虐殺のもろもろの原因が突き止められようし、死者の言葉を蘇らせることもできよう。真実が語られ、そこから教訓を学ぶことができるはずだ、というのが前提だつたから。

その書の章の一つは、二〇世紀における転換点、すなわちヨーロッパで第二次世界大戦の発端となつたナチス・ドイツとソ連の同盟関係を主題にしていた。一九三九年九月、ナチス・ドイツとソ連は、両国ともポーランド国家とポーランドの政治階級を破壊する目的を持ってポーランド

に侵攻した。一九四〇年四月、ソ連の秘密警察が二万一千八百二人のポーランド人戦時捕虜を殺害した。犠牲となった者の多くは、教育を受けた予備役将校だった。男たち（女性も一人含まれていた）は、五ヶ所の処刑場で後頭部を銃で撃たれて殺害された。その処刑場の一つがソ連のロシア共和国にあるスモレンスク近郊のカティンの森だった。ポーランド人にとってカティンの森の虐殺は、汎くソ連の弾圧を意味するようになった。

第二次世界大戦後のポーランドは共産主義体制の支配下に入り、ソ連の衛星国であったため、カティンの森事件については議論ができなかった。歴史家は、一九九一年にソ連が崩壊してはじめて何が起きたのかを解明することができた。ソ連の公文書によれば、この大量虐殺がヨシフ・スターリンによって直接に承認された周到な政策であったということに疑問の余地はなかった。ソ連が終焉を迎えたあと、新たに生まれたロシア連邦は、スターリン主義者によるテロルの遺産を処理するのに苦労していた。私が自分の書の最終の仕上げにかかっていた二〇一〇年二月三日、ロシアの首相がポーランドの首相に対して驚くべき提案をした。四月に「カティンの森事件」の七〇周年追悼式典を共同で行おうと持ちかけたのだ。息子の出産予定日だった四月一日の真夜中、私は書きあげた原稿を出版社に送った。そして四月の七日、ポーランドの首相に率いられたポーランド政府派遣団がロシアに到着した。私の妻が出産したのはその翌日のことだった。

その二日後、ポーランド代表団の第二陣がロシアに向けて出発した。そのなかにはポーランド大統領夫妻のほかにもポーランド軍司令官、国会議員、市民活動家、聖職者、一九四〇年のカティンの森事件の犠牲者の遺族がいた。代表団のメンバーの一人が、私の友人にして高名な政治理論

家——そして追悼式典の責任者を務める文化副大臣——のトメク・メルタだった。二〇一〇年四月一〇日の土曜の早朝に、トメクは機上の人となった。午前八時四一分、飛行機はスモレンスクにあるロシア軍飛行場の滑走路手前で墜落した。生存者はいなかった。ウィーンの産科病棟で携帯電話が鳴り、新米ママのポーランド語の叫び声が病室に響きわたった。

次の日の夜、私は息子の誕生の報告への返事に目を通した。友人の一人は、喜びの只中で私が悲劇を知ることになるのを心配してくれていた。「君は自分が辛い状況にいると知らないようなので、トメク・メルタが亡くなったことを僕から伝えねばならない」。飛行機に乗ることになっていた別の友人は、予定を変えて自宅にいることにしたんだよ、と書いてよこした。彼の妻が数週間後に出産を控えていたのだ。

彼はメールの最後にこう書いていた。「これからは何もかもが変わってしまうね」。

オーストリアでは、出産したばかりの母親たちは、新生児の食事、入浴、世話などについて看護師から教わるため、産科病棟に四日間入院することになっている。それだけの時間があれば、家族同士が顔なじみになり、親たちはどの言葉なら相手に通じるかがわかって、自然と会話が始まるものだ。産科病棟で翌日にポーランド語で交わされたのは陰謀説だった。噂は具体性を帯びていた。ロシアが飛行機を撃ち落としたとか、首相とは出身政党が異なる大統領の殺害計画にポーランド政府が一枚噛んでいたとか……。ポーランド人の新米ママの一人に、どう思いますかと

尋ねられた。どれもまるでありそうにない話ですね、と私は答えた。

翌日には退院を許された。バスケットのなかで眠る赤ん坊の傍らで、私はトメクについての記事を二つ書いた。一つはポーランド語での死亡記事、もう一つはこの惨事について説明する英文の記事で、私はそれをロシアに対する期待を込めた言葉で締めくくった。ロシアの国土で行われた犯罪の犠牲者を追悼しようと急いでいたポーランドの大統領が亡くなった。ロシアのウラジーミル・プーチン首相には、これを機会にスターリン主義の歴史についてもっと大局的に考えてもらいたい、と希望を述べた。おそらくこれは、二〇一〇年四月の深い悲しみのなかにあつては妥当な訴えであつたろうが、推測としてはまったくの見込み違いだった。

「これからは何もかもが変わってしまうね」。そのとおりになった。首相になる前に大統領としてすでに二期を務めていたプーチンが、二〇一一年九月にはふたたび大統領になる意思を表明した。その年の一二月の議会選挙で、彼の政党は低迷したにもかかわらず議会の過半数を獲得した。不正があつたと見られるもう一つの選挙を経て、二〇一二年五月にプーチンは大統領に返り咲いた。するとプーチンは、たとえばカティンの森事件についてかつて自ら先駆けて行ったようにソ連の過去について議論することが、以後はなんと犯罪行為として扱われるように計らった。ポーランドでは、二〇一〇年四月のスモレンスクの大惨事が社会を團結させたのは一日限りで、その後何年にもわたりこの一件はポーランド社会を分裂させることになった。大惨事へのこだわりが時とともに強まって、七〇年前の犠牲者が追悼されるはずだったカティンの森の虐殺がどこかに追いやられてしまった。それどころかポーランド人の受難の歴史のエピソードがすべてどこかに

追いやられてしまったのだ。ポーランドもロシアも、歴史を振り返ることをやめてしまった。時代は変わりつつあった。あるいは、私たちの時間の感覚が変わりつつあったのかもしれない。

EUに影が忍びよっていた。手頃な保険料ですべてがカヴァーされるウィーンの産科病棟は、このヨーロッパのプロジェクトが成功したことを再認識させてくれるものだ。このような公共サービスはヨーロッパの多くの国ではごく当たり前のことだが、アメリカでは考えられない。私を病院まで運んでくれた速くて信頼できる地下鉄についても同じことが言えるかもしれない。ヨーロッパでは普通のことでも、アメリカではそうはいかないということだ。二〇一三年にロシアはEUと対立し、EUを退廃的だし敵対的であると非難した。EUの成功を目の当たりにしたロシア人たちが、かつての帝国も繁栄する民主主義国家に変貌しうるのだと思いかねないことから、EUの存在がロシアにとって突如として脅威になったのだ。

ロシアの隣国ウクライナがEUに接近したため、二〇一四年にロシアはウクライナに侵攻し、その領土の一部を併合した。二〇一五年になると、ロシアは、ヨーロッパやアメリカの大勢の人の手を借りて、ウクライナだけでなくヨーロッパやアメリカにまで桁外れのサイバー戦争を仕掛けるようになった。二〇一六年にイギリスが国民投票でEUからの離脱を決めたが、これはモスクワが長年提唱してきたことだったし、この年アメリカがドナルド・トランプを大統領に選んだが、これもロシアの工作活動の成果だった。この新しいアメリカ大統領の数多ある欠点の一つは、歴史を振り返ることができないということだ。トランプは、ホロコーストの犠牲者を追悼する機会があっても追悼の意思表示ができなかったし、自国のネオナチの糾弾もできなかった。

二〇世紀は完全に終わり、そこから教訓が学ばれることはなかった。新たな政治のかたちがロシア、ヨーロッパ、アメリカに出現した——それは新たな時代に似合った、新たな「自由なき世界」である。

スモレンスクの惨事に関する二つの記事を私が認めたのは、生と死の政治について何年も考えてきたあと、この二つを隔てる膜が薄くなったように見えた夜のことだった。「不幸のさなかの君の幸せ」と友人の一人は書いてきていたが、幸せすらも不幸と同じくらい不当なものに思えた。終わりと始まりがあまりに近すぎるのか、もしくは順番が間違ってしまったように思えた。生前に死が、誕生の前に臨終が来てしまった。世の中の籬が外れてしまったのだ。

おそらく二〇一〇年の四月ごろを境に、人間の気質というものが変わってきたのだ。はじめての子どもの誕生を知らせるメールを書いたときは、コンピュータを使うために自分のオフイスまで行かなければならなかった。スマートフォンはまだ普及していなかった。返事が来るのはすぐにはなく、数日か数週間先だろうと思っていた。その二年後に娘が生まれたころには、すっかり状況が変わっていた。スマートフォンを持っているのが当たり前になり、返事はすぐに来るか、そうでなければずっと先かのどちらかだった。子どもが二人になるのは一人のときとかなり違うが、それでも私が思うに二〇一〇年代初めには、誰にとっても時間はさらに細切れになり、とらえどころのないものになってしまった。

時間を生みだすはずの機器が、逆に時間を呑み込んでいた。集中して過去を思いだす能力を失うにつれ、私たちには何もかもが新鮮に見えてくる。トニーが亡くなったあとの二〇一〇年八月に、私はトニーと共同で執筆した書について読者と意見交換するためのブックツアーに出かけた。トニーはこの書に『20世紀を考える』というタイトルをつけた。アメリカ国内をまわるにつれて、私はこの本のテーマがすっかり忘れ去られていることに気がついた。行く先々のホテルの部屋で観たロシアのテレビが、アメリカ人にトラウマを残すこの国の人種の歴史をもてあそび、バラク・オバマがアフリカ生まれだとほめかしている。なんとも奇妙なことに、それからまもなくアメリカでも、エンターテナーのドナルド・トランプがこの話題を持ちだした。

アメリカとヨーロッパの人々を新たな世紀に導いたのは、「歴史の終わり」にまつわる物語だった。これを私は「必然性の政治」(ポリティクス・オブ・イネビタビリティ)と呼ぶことにする。必然性とは、未来はただ現在の延長にすぎず、進歩の法則は周知のことで、代替オルタナティブの策はなく、よつて自分たちになすべきことは何もないと感ずることだ。アメリカの資本主義者が語るとすれば、それは自然が市場をもたらし、市場が民主主義をもたらし、民主主義が幸福をもたらし、ということになる。かたやヨーロッパの人々が語るとすれば、歴史が国民をもたらし、国民が戦争の経験から平和が良いものだ^{と学んだ}からこそ統合と繁栄を選んだ、ということになる。

一九九一年にソ連が崩壊するまでは、共産主義にも独自の必然性の政治があった。それは、自然が科学技術の発展を可能にし、科学技術が社会変革をもたらし、社会変革が革命を引き起こし、革命がユートピアを実現させるといふものだ。そして、それが真実ではなかったとわかったとき、

ヨーロッパやアメリカの必然性を唱える政治家たちは有頂天になった。ヨーロッパは一九九二年にはEUを成立させるのに忙しかった（マーストリヒト条約は同年に批准され、翌年に発効した）。一方、アメリカは、共産主義者の筋書きの失敗は、資本主義者の筋書きの方が真実であることを裏づけるものと判断した。共産主義の終焉から四半世紀のあいだずっと、アメリカとヨーロッパは自分たちの必然性の物語を自らに言い聞かせてきたし、そうやって歴史を知らない二一世紀の世代を育ててきたのだ。

だがアメリカの必然性の政治もまた、その手の話の例に漏れず事実^に反していた。一九九一年以降のロシアやウクライナ、ベラルーシの運命を見れば、ある体制の崩壊が白紙の状態をつくりだし、そこに自然発生的に市場が生まれ、市場が権利を生みだす……などといったことが起きないのはじゅうぶんわかることだ。二〇〇三年にイラクでこの教訓を再確認することもできただろう——仮に、アメリカによる違法な戦争の首謀者たちが、その悲惨な結末を顧みていたとしたら話だが。二〇〇八年に世界的な金融危機が発生し、二〇一〇年にアメリカで選挙献金の上限が撤廃されたことにより、富裕層の影響力が肥大化し、有権者の影響力が減衰した。経済的不平等が拡大するにつれ、時間的視野^{タイムホライズン}が狭くなり、今よりもっと良い未来が待っていると信じるアメリカ人の数も減った。他国では当たり前^にに享受できる基本的な社会財——教育、年金、健康保険、公共輸送機関、男性育児休暇、長期休暇——が保証される状態にないアメリカ人は、日々の暮らしに打ちのめされ、未来を意識できなくなっても不思議でなかった。

必然性の政治が崩壊した先には、別の時間の捉えかたが待ち受けている。それは「永遠の政

治」(ポリテイクス・オブ・エタニティ)だ。必然性の政治は、皆にとつてのより良い未来を約束するが、永遠の政治は、繰り返される受難の物語の中心に一つの国家を据える。そうなると時間とは、もはや未来へと延びる一本の線ではなく、過去の同じ脅威へと際限なく回帰する円になる。必然性の政治では、誰一人責任を負う者はいないが、それは物事がすべてひとりで良い方向に進むと誰もが承知しているからだ。永遠の政治でも、誰一人責任を負うものはいないが、それは自分たちが何をしようとするのみち敵が現れることを誰もが承知しているからだ。永遠の政治を唱える政治家たちは、政府にできるのは社会全体を支援することではなく、ただ脅威から守ってやることだけだと汎く世間に信じさせる。かくして進歩が「運命」に道を譲るのだ。

いざ権力を握ると、永遠の政治を唱える政治家たちは危機をでっちあげ、その結果生じる感情を操作する。そして自分たちに改革ができないことや、改革に乗り気でないことから国民の目を逸らすため、頻繁に喜んだり怒ったりするよう国民に教えこみ、未来を現在に埋没させる。また外交政策においては、自国の人々の目に手本のように映りかねない外国の偉業は貶めて、あげくはなかったことにしてしまう。永遠の政治を唱える政治家たちは、政治の作り話を伝える技術を駆使して国の内外を問わず真実を否定し、生活を見世物や刹那の感情の次元に引き下げてしまう。

二〇一〇年代には、おそらく私たちが気づいているよりも多くのことが起きていた。スモレンスクの飛行機事故(二〇一〇年)からトランプの大統領就任(二〇一七年)までの怒濤の日々は、お

そらく私たちがそれとは知らずに体験した大変化の時期だったのだ。おそらく私たちは、一つの時間の感覚から別の時間の感覚へとすつと移ってゆくところなのだ。なぜなら歴史がいかに私たちをつくっていくか、また私たちがいかに歴史をつくっていくかを、私たちは現在見ようとしていないのだから。

必然性も永遠も、事実を物語ナラタテに変えてしまう。必然性に惑わされた者は、いかなる事実も、進歩の物語全体を変えることなどない些細な逸脱とみなす。永遠へと転じた者は、どんな新たな出来事も、時を超えて存在するもう一つの脅威に過ぎないと考える。どちらも歴史の仮面を被り、そのくせどちらも歴史を退ける。必然性の政治を唱える政治家たちは、何が起るにせよ進歩の役に立つのだから、過去の細々したことなど無意味であると説く。一方、永遠の政治を唱える政治家たちは、ある瞬間から別の瞬間へと、何十年あるいは何世紀をもひよいと飛びこえ、無垢と危機の神話を紡ぎだす。彼らは過去に繰り返されてきた脅威に想像をめぐらせては、わざとらしい危機と日常のドラマを創りだすことで、現在に彼らの納得できる空想上のパターンを見いだすのだ。

必然性にも永遠にも、独自のプロパガンダの流儀がある。必然性の政治を唱える政治家たちは、事実を紡いで幸福の蜘蛛の巣を編んでみせる。一方、永遠の政治を唱える政治家たちは、他国の人々の方が自分たちより自由で豊かであるという現実や、知識に基づき改革を練ることができるといった考えを否定するために、事実をもみ消してしまう。二〇一〇年代に起きていることの大半は、政治の作り話——衆目を集め、よく考えるすきを与えない桁外れの物語の数々——を入念

にしつらえているにすぎない。とはいえプロパガンダがそのときどんな印象を与えようと、それは歴史が下す最終的な判決ではない。記憶と歴史のあいだには違いがある。記憶は私たちが受ける印象に過ぎない。歴史とは、私たちが苦勞してつながりを持たせるものだ——その勞を私たちが惜しまないかぎりだが。

本書は、歴史的な時間のために現在を取り戻し、そうすることで政治のために歴史的な時間を取り戻そうと試みるものである。つまりは、事実の重要性そのものが疑問視される時代に、ロシアからアメリカまで現代史における相互に関連した一連の出来事を理解しようとすることになる。二〇一四年のロシアによるウクライナ侵攻は、EUとアメリカにとって、いわば現実認識の試金石だった。ヨーロッパとアメリカの多くの人々には、法秩序を守ることよりも、ロシアのプロパガンダのもたらす幻影を追う方がたやすかった。ヨーロッパとアメリカの人々は、侵攻が実際に行われたのか、そもそもウクライナは国家なのか、ウクライナには侵攻されても当然の理由があったのか……を問うことで時間を浪費してしまった。それによってEUとアメリカの抱える深刻な脆弱性が露呈することになり、ロシアはすぐさまそれにつけこんだ。

学問としての歴史は、戦争のプロパガンダに対抗するものとして始まった。最初の歴史書『ペロポネソス戦争史』で著者のトゥーキュディデースは、指導者たちの行動についての彼ら自身の説明と、彼らの決定における真の理由とを慎重に区別した。現代でも、不平等の拡大が政治の作り話を持つてはやすなか、調査報道の価値はますます高まっている。調査報道の復興が^{ルネサンス}始まったのは、ロシアがウクライナに侵攻しているさなかのことで、このとき勇敢な報道記者たちが危

険な場所から記事を送り続けた。ロシアとウクライナでのジャーナリズムの関心はそれまでは泥棒政治クレイクラシと不正の問題に集中していたのだが、こうしたテーマで経験を積んだ報道記者たちが、今度はこの戦争を報じたのだ。

大規模な不平等が固定化し、プロパガンダが政策に取って代わり、必然性の政治から永遠の政治に移行するなどロシアで実際に起きたことは、アメリカやヨーロッパでも起こりうる。ロシアの指導者たちがヨーロッパやアメリカを永遠の政治に誘いざなうことができたのは、ロシアがこれに一番乗りしたからだ。彼らにはアメリカやヨーロッパの弱点がわかっていたが、そもそもそうした弱点は、ロシアの指導者たちが最初に自国で見つけて利用したものだ。

ヨーロッパとアメリカの多くの人々にとって、二〇一〇年代に起きた一連の出来事——反民主主義的な政治が台頭し、ロシアがヨーロッパと対立してウクライナに侵攻し、イギリスが国民投票でEU離脱を決め、トランプが大統領選挙で勝利した——はまさに青天の霹靂へきれきだった。この驚愕の事態にアメリカ人はおおむね二通りの反応を示した。予期せぬ出来事のことを本当は起きていないのだと考えるか、もしくはこれは前代未聞の事態なので歴史的に理解するなど無理に決まっていると断言するか、のいずれかだった——どのみち万事うまくいくだろうと思うか、もしくは万事が最悪で手の打ちようもないと思うかだったのだ。前者の反応は、必然性の政治に備わる防御メカニズムであり、後者の反応は、必然性が破綻して永遠の政治に道を譲る直前に立きてる軌

り音だ。必然性の政治がまず市民の責任感を徐々に蝕み、その後、重大な問題に直面して破綻すると永遠の政治に陥る。ロシアの推す候補者がアメリカの大統領になったときに、アメリカ人が示したのはそうした反応だった。

一九九〇年代と二〇〇〇年代には、影響は西側から東側へと伝わった。経済や政治のモデルが移植され、英語が普及し、EUと北大西洋条約機構（NATO）が拡大した。そうこうするうちに、ヨーロッパやアメリカの資本主義世界のなかの規制が及ばない空間が、裕福なロシア人を、オフショア口座やダミー会社、匿名取引などといった東側・西側という地理的な区分とは無縁の領域に呼び寄せた。ロシア国民から盗まれた富が、ここできれいに洗^{ロンダリング}浄されたのだ。こうした理由もあって、二〇一〇年代になると今度は影響が東から西へと伝わり、例外であったオフショア取引が常套手段となり、ロシアの政治の作り話が国外へと浸透していった。トゥーキューディーデーは『ペロポネソス戦争史』のなかで、「寡頭政治」を「少数による支配」と定義し、これを「民主主義」と対立するものとした。アリストテレスは「寡頭政治」を「少数の富裕層による支配」と考えた——こちらの意味での「寡頭政治」という言葉が、一九九〇年代にロシア語のなかで蘇り、やがてそれなりの理由があつて、二〇一〇年代には英語のなかで復活したのだ。

つまるところ、概念とその実践が、東側から西側へと動いたのだ。「フエイク・ニュース」の「フエイク」という言葉がその一例である。この言葉はアメリカの発明のように聞こえるし、ドナルド・ ترامプも彼自身の発明だと言い張ったが、実際はアメリカで現れるずっと前からロシアとウクライナで使われていた。これはニュース記事を装った作り話をでっちあげてことを意味